

# 問孔篇初探

松尾善弘

(一九七九年十月十一日 受理)

## 一 王充は「反孔」か

「百家を罷黜し儒術のみを尊崇せよ」という董仲舒の対策を受けて、漢の武帝は儒教を国家の正教として奠定し思想界の一統を図った。かかる思潮の中で、董仲舒の「天人感應説」をはじめ「君権神授説」を批判し、なかならず儒教の総本山たる孔孟の「天命論」や「礼教観念」批判を展開した王充の歴史的意義は大きい。<sup>1)</sup>

今日の時点からみると、王充の思想は、「時代の制限を受け」て、「儒家の思想的影響下から脱却しきれない」(鐘達「論王充的反儒斗争」一九七四年『紅旗』第八期)、あるいは、「単純な形式論理法による批判である」(『読一点法家著作』『儒法斗争史概況』)、また、「その唯物論思想の不徹底さが彼自身を観念論的宿命論に陥れる原因ともなった」(田昌五『王充——古代的戦斗唯物論者』)等々の弱点を備えたものであったことは否めない。だが儒家思想に対する懐疑や不敬が「非聖無法」の罪名のもとに首を刎ねられかねない時勢の中にあつて、正々堂々と問孔刺孟を綴り得た強靱な批判精神こそは多しななければならぬであろう。<sup>2)</sup>

最近、王充研究がすすむ中で彼が果して「反孔」であつたかという問

題が争点の一つになつている。例えば周桂鈿・王生平氏は「王充反孔嗎」(光明日報<sup>79</sup>・1・11)で王充評価に関して、「孔子を盲信(原文は「迷信」)することに反対すること、孔子そのものに反対することとを混同して論じてはならない」と指摘しつつ、「梁效」流の(四人組の)徒が王充を「大法官」の列に加えて「反孔」であつたとしているが、王充は多くの箇所孔子を尊崇し孔子を聖人と称しており「反孔」とは言いきれない」と述べている。そもそも王充が「尊孔」か「反孔」か、ないし「尊法反儒」かに色分けすることだけを目的とした研究では王充の真価を見失う危険性が大きい。王充の真髓は周王両氏の言う、「唯物論と弁証法の因素を含む」思考方法をとつているところにあり、尊孔色の風潮に抗して彼が科学的分析的態度を堅持しつつ自由自在な議論を展開している側面をこそ掘り起し顕彰すべきであろう。王充ほど激越な賛否両評価に分かたれる思想家も珍しい。それは、その時代その社会の厳しい思想対立の反映でもあるが、彼に対する評論が即、古今東西にわたつて、評者自身の世界観を露呈することにもなる現実を我々は確かに知つてゐる。<sup>3)</sup>

「後漢の王充は『論衡』の問孔篇において甚だしく理解のない仕方『論語』に攻撃を加えている」(白川静『孔子伝』中央公論社14頁)。——果

してそうなのかどうか、本論では王充の提起した問題点を、特に朱子の解釈と対比させつつ逐条的に精査し、王充の発想のユニークさを究明してみようと思う。孔子と王充と朱子の三巴の關係で捉えていくことが、同時にそれぞれの思想の特色を闡明にする効果を生むと考える。

## 二 「信師是古」をめぐって

問孔篇は次のような書き出しで始まる。迫力のあるその文章からは著者の覇気が自ずと感得され、戦斗的唯物論者という田氏の猷称が文章表現上からもあながち的はずれではないことを窺わせる。以下、いくつかの文を拾って吟味しながら論を進めようと思う。

世儒学者、好信師而是古、以為賢聖所言皆無非、專精講習、不知難問。夫賢聖下筆造文、用意詳審、尚未可謂盡得実。況倉卒吐言、安能皆是。不能皆是、時人不知難。或是、而意沈難見、時人不知問。案賢聖之言、上下多相違、其文前後多相伐者。世之学者、不能知也。

王充は「当時の儒学者達が師を信じ古を是とすることを好み、賢聖のいうことはすべて非なしと思ひこんでいる。そしてただ専精講習するのみで問難することを知らぬ」状況を発くことから始める。疑い問う精神を欠如した儒学者たちのこのような硬直した聖賢信仰については齊世篇でも、「事を述ぶる者は古を高しとして今を下とするを好み、聞く所を貴びて見る所を賤しめ、弁士は則ち其の久しき者を談じ、文人は則ち其の遠き者を著わす」と断じ、「上は則ち虞夏を求め、下は則ち殷周を索め」る彼らの「厚古薄今」傾向を厳しく批判しているのである。ところこの「信師是古」こそはかつて春秋戦国期に儒家と法家が命を賭して

論戦しあつた際に、両者を明分するキー・ワードとなつたものである。つまり表現上の違いこそあれ、上世や古聖賢の言を至善とみる儒家の発想「古に法る、礼に循う」に対し、法家は一度上古を否定した観点「古に法らず、礼に循わず」から出発する。商鞅の更法(4)において然り、韓非子の有名なエピソード「守株」の条(5)において然りである。してみると、その思想の重要な部分において、王充がこれら法家者と共通項を持つことは明らかである。王充は儒学者の標榜する「今不如昔」が時代錯誤の思想であり、逆に彼らこそ「知古不知今」の徒であると指弾し、「当今は百代の下にあり(齊世論)」と喝破しているのである。但し、このことから直ちに王充を法家者の列に加えて論ずるのは如何にも性急であり短絡の誹りを免れないであろう。(6)

そもそも賢聖が筆を下して文を造る場合、用意詳審ではあろうけれども、なおまだ盡く実(まこと)を得ているとはいいきれない。ましてや倉卒に吐言したものがどうしてすべて正しいと言えようか。ところが当時の人はそれを問難することをしなかった。あるいは、言文は正しいが意味が深く沈潜していてわかりにくい場合も、彼らは難問することを知らなかったのである。考えてみると、聖賢の言でも上下相違することが多いし、文章の前後の辻褄があわぬものも多い。にも拘らず世の学者は気がつかないのである。

王充の目は鋭く聖賢の書に注がれ、非科学的なもの、非論理的なものを見逃すまいとする。書虚篇でも同様の見解が述べられている。「世、虚妄の書を信じ、以為おもへらく、竹帛の上に乗せらるる者はみな賢聖の伝うる所にして然らざるの事なしと。故に信じて之を是とし、諷して之を讀み、真是の伝と虚妄の書との相違するを睹れば、則ち并なてて短書は信用

すべからずと謂う。夫れ幽冥の実なほ知るべく、沈隱の情なほ見定むべし。顯文露書は是非見易きに、籠總して実事に非ざるを并せ伝うるは、精を用うるに専らならず、事に思ふ無ければなり。そもそも「論衡の造らるるは、衆書の並びに実を失ひ、虚妄の言の真実に勝つに起る(対作篇)」ことではあった。

論者皆云う、孔門の徒、七十子の才は、今の儒に勝る、と。此の言、妄なり。彼、孔子の師たるを見、聖人の道を伝うるは必ず異才に授く、故に之を殊と謂へるならん。夫れ古人の才は、今人の才なり。今は之を英傑と謂ひ、古は以て聖神と為す、故に七十子は歴世有ること希れと謂ふ。当今孔子の師有らしめば、則ち世の学者は皆顔・閔の徒と謂らん。孔子無からしめば、則ち七十子の徒は、今の儒生なり。何を以て之を驗するや。孔子に学ぶも、極問する能はざるを以てなり。聖人の言、盡くは解する能はず。道を説き義を陳ぶるも輒ち形する能はず。輒ち形する能はざれば、宜しく問ひて以て之を<sup>ひら</sup>発くべく、盡く解する能はざれば、宜しく難じて以て之を極むべし。阜陶、道を帝舜の前に陳ぶるや、浅略にして未だ極めざれば、禹、之を問難し、浅言復た深められ、略指復た分かる。蓋し問難を起すや、此の説激せられて深切に、触せられて著明たるなり。

「難問」とは難疑答問の謂いであるが、ここで王充は、議論の弁証法的発展、批判的古文化の受容を説いている。いわれのない古代信仰、根拠のない古聖賢信奉に嚴重な警告を発している。社会が時代とともに変化するものである以上、ある時点での判断がそのまま後世にわたる金科玉条となつてはならないのである。ただし、ここにおいて王充は、無前提で孔子尊崇の言を以て補説し、自らの弱点をも露わにしている。

### 三 「子游の弦歌を笑ふ」に対する王充と朱子

問孔篇の前文で、王充は、孔子に対する子游の反論の条を例にあげて問難の重要性を主張している。論語陽貨篇にみえるその孔子と子游のやりとりを次に掲げ、この簡条に対する王充の理解の仕方と姿勢を明らかにしてみよう。同時にそれと比較対照して、朱子の注をひもときながら、朱子のこの簡条に対する理解の仕方を考察し、そこから論語(すなわち孔子)に対する姿勢を導き出してみたい。

○子之武城、聞弦歌之声。夫子莞爾而笑曰、「割雞焉用牛刀。」子游對曰、「昔者偃也、聞諸夫子。曰、『君子學道、則愛人、小人學道、則易使也。』」子曰、「二三子、偃之言是也。前言戲之耳。」(陽貨篇)

孔子が武という小邑を通りかかったとき、邑人が弦歌する声を聞いた。孔子はにっこり笑って、だが、「鶏を料理するのにどうして牛庖丁を使う必要がある」といって子游をからかった。そのことをばを聞いた子游はムツとして反論して言うには、「以前、私はこういう風に先生がおっしゃるのを聞きました。『君子が道(礼樂)を学べば人を愛するようになり、小人が道を学べば使い易くなる』と」。孔子は「弟子たちよ、偃の言うことが正しいよ。先ほどはちょっと戯れに言ってみただけだよ」と答えた。

先の阜陶の例にしても、また右の例にしても、王充は、われわれがあれこれの問題を理解する上で互いに質問し啓発し合うことがいかに重要であるか、事実を追究する上で問難法がいかに有効であるかを強調して

いる。その王充の意図に沿う形でおよそ右のような訳を付してみた。すると、われわれはこの場の雰囲気から、とりあえず孔子と子游の飾らない親近感溢れる師弟関係と、子游が隔りのない自由な発言をしている状況を汲みとることができよう。孔子が不用意に洩らした中傷に對し即座に反論する子游。やりこめられた孔子がてれかくし笑いをしながら周囲の弟子たちに向って、「いや、さつきはちょっとからかっただけさ」と弁解している様子からは、ぎくしゃくした師弟関係など微塵も感ぜられない。むしろ人間孔子の面目躍如たる場面ですらある。範例として引用している以上、王充はこの部分を孔子集團の日常生活の一コマとして、肩肘のこらないごく自然なスケッチとして想定したに相違ない。いやむしろ人間性豊かな師弟とはかくあるべしと念じているとさえいいたいほどである。われわれも普通このように解釈する。

一方、この章句における朱子の解釈態度はこうである。「子游の称する所は蓋し夫子の常言なり（昔者優也聞諸夫子の注。それは多分先生がいつもおっしゃっていることなのだ）。「夫子は）子游の篤信を嘉み、また以て門人の惑いを解くなり（前言戲之耳の注。子游の篤信をほめると共に、門人たちの惑乱を解いてあげられたのだ）。「治に大小あり、而してその之を治むるにまた必ず礼樂を用うれば則ちその道（方法）たるや一なり。但だ衆人の用うる能はざるもの多きに子游のみ独り之を行う。故に夫子驟聞して深く之を喜び、因りてその（常）言にして以て之に戯る。而るに子游正を以て對す。故に復たその言を是とし自らその戯るるを笑（あかし）するなり。」——これらの朱子の解説を追っていくと、われわれは全体的に一種金しばりにあったような感じをもつ。一点の曇りもない尊師が高弟の一人を諭し、ついでに門弟達にも教訓を垂れ給うた。朱子の念頭には、冷静で厳格な禪問答の場のような情況が浮かんでいたのではないかと推測される。冗談をいい合いながらしかもそこ

に深い人間性をにじみ出させた雰囲気として捉える王充の人柄と、宗教的垂訓的それとして捉える朱子の人となりのちがいが読みとれよう。同時にそれは両者の對孔子觀に由来するものでもある。

問孔篇の前文は次のようにして結ばれる。

凡そ學問の法は、才無きを畏れず。師を距み、道の実義を核め、是非を証定すること難きなり。問難の道は、必ずしも聖人の生時に及ぶに對するに非ざるなり。世の解説して人に説く者は、必ずしも聖人の教告を須って、乃ち敢へて言ふに非ざればなり。苟に曉解せざるの問あらば、孔子を追難すとも、何ぞ義を傷はん。誠に聖業を伝ふるの知あらば、孔子の説を伐つも、何ぞ理に逆はん。孔子に問ふの言、その解せざるを難ずるの文を謂ひて、世間の弘才大知の生、能く問に答へ難を解する人は、必ず將に吾が難問の言を賢とせんす。

學究の徒としてはおよそ才能の有無なぞ問題ではない。道に當っては師にも譲らぬ精神と、道の真意を究明し、是非を判定することこそ本務となる。「王充が學問の道を論じて、核道実義、証定是非という表現を用いている事實は、それが単に異った立場における相対的非論でなく、一つの思想を成り立たしめる基本的な要素の意味自体にまで溯って、その真偽を検討しようとする姿勢を取っていると考えられる点において、もっとも注目されてよいであろう。」（重澤俊郎『中国哲学史研究』二七二頁）数百年を経過した後からなされる聖賢の追批判も、真実の闡明という最高目的の前には、何ら道義を傷つけることにはならない。そこに於いて彼は明瞭に宣言する。「追難孔子、何傷於義。伐孔子之説、何逆於理」。

#### 四 「女与回也孰愈」の解釈をめぐって

問孔篇の中で前文に続いて、王充はおよそ十八項目にわたって論語即ち孔子の言論に対し批判攻撃を行なっている。以下、三カ条のみ選んでその論点を追うと共に、同箇条を朱子はどのように解釈しているか比較検討してみよう。そこから必然的に両者の対孔子観ないし姿勢が導き出されてくるであろう。

○子謂子貢曰、「女与回也孰愈。」曰、「賜也何敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知二。」子曰、「弗如也、吾与女不如也。」(公冶長篇)

王充は言う。

これは孔子が顔淵を賢としながらも、ためにに子貢にたずねてみた文だとされる。それでは一つ質問したい。本来、孔子の教えは礼讓を基本とする<sup>(10)</sup>。子路が国を治めるのに礼を以てすと答えたとき、其の言譲らずといって孔子は子路を非難したことがあった<sup>(11)</sup>。そういうことだから、もし子貢の方が実際に顔淵よりまさっていたとしても、孔子が右の問いを發した場合、子貢は「およびません」と答えるに決っている。現実によさっていないければなおさら「およびません」という答えが返ってくる筈だ。これは決して師に対してうそ偽りを申し上げたことにはならない。礼讓あることばとして当然卑下してみせるべきだからである。そうすれば、いま孔子のこの問いはどういう趣旨で發せられたことになるのだろうか。顔淵の方が子貢より勝れていることを孔子が知っていたとすると、わざわざ子貢に問う必要はない。孔子が実際に知らなかったとしても、子貢に問うたこと

ろで、彼は謙遜して答えるわけだからやはり知ることはできない。顔淵の賢をほめたたえたいという氣持があったのなら、それを言うのに他にことばはいくらでもあったはずである。わざと子貢に問うまでもないことなのだ。例えば、「子曰く、賢なるかな回や」「吾、回と言ひ終日違はざること愚なるが如し」「回やその心三月仁に違はず」の三章<sup>(12)</sup>などは、顔回を直接ほめていて、他の人間を介在させたり利用したりしてほめようとはしていない。ところがこの章に限ってなにゆえことさら子貢を引き合いに出して顔回の賢を強調したかったのだろうか。——この疑問に対してある人は次のように弁解してみせた。孔子は子貢を抑えようとなさったのだ。当時、子貢の名が顔淵を凌いでいたので、孔子は子貢が慢心することを恐れて抑えられたのだ、と。だが、そもそも名が顔淵の上をいったというのは時世のなせるわざであり、子貢が自分から求めたわけではない。子貢はそのところをどの程度認識していたであろうか。顔淵が自分より上にあることを知っておれば、自から認め服したであろうから、外から抑止する必要などはない。またもしそういう意識をもちあわせていなかったとすれば、孔子が傍からとやかく言ってみたところで、子貢にしてみれば、かえって師が自分を抑えつけようとしていると感ずるのが関の山であろう。とすれば、孔子が問うと問わずとに拘わらず、抑えつけたいとかもちあげたいとかいうことも全然関係のないことになる。

いくら師弟の間柄とはいえ、いや師弟の間柄であればなおさらのこと「お前と某とはどちらが勝れているかね」などと人を屈辱の心境に追い込むような問いかけをしてはならない。しかもそれは孔子がかねがね教えている礼讓の精神に根本から悖るではないか、というのが王充の問難

